近代地方都市の公立名門高等女学校における生徒文化の特徴と構造
― 家庭教育と学校教育のせめぎ合いに着目して ―

The Feature and Structure of Student Culture at a Local Prestige Girls' School in Prewar Days: Focusing on the Conflict between Home and School Principles

土田 陽子（京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程）

【ねらいと目的】

高等女学校は、近代日本における中流以上の階層の少女を対象とした女子中等教育機関であった。高等女学校の教育目標は未来の「良妻賢母」を育てることであり、その学校数は私立よりも公立の方が圧倒的に多かった。

本研究は地方都市の公立名門高等女学校に焦点を当て、生徒文化の特徴と構造について学校文化と家庭背景の関係から明らかにしようとするものである。具体的には、学校（公共圏）側が行っていた教育実践や身に着けさせようとした規範に対し、女学生たちがどのように解釈し意味づけ、どのような態度や気持ちで受容していたのか、またこうした学校文化への適応や受容の仕方は彼女たちが属する地域や家庭（親密圏）の生活文化や教育方針の違いによって、いかなる特徴や差異が見られたのかについて検討していく。本研究では、城下町として発展していたという条件と、通学圏内にミッション・スクールが存在しなかったという 2 つの条件を満たす地域として旧和歌山市を選び、その地に存在していた県立和歌山高等女学校（以下、和高女という）を分析対象校とし、卒業生へのアンケート調査とインタビュー調査のデータを用いて分析を進めていくことにした。

【活動の記録】

史料調査：2009 年 7 月～9 月
和歌山県立図書館・和歌山市民図書館・和歌山大学にて

インタビュー調査（追加分）：2009 年 12 月～1 月　和歌山市にて

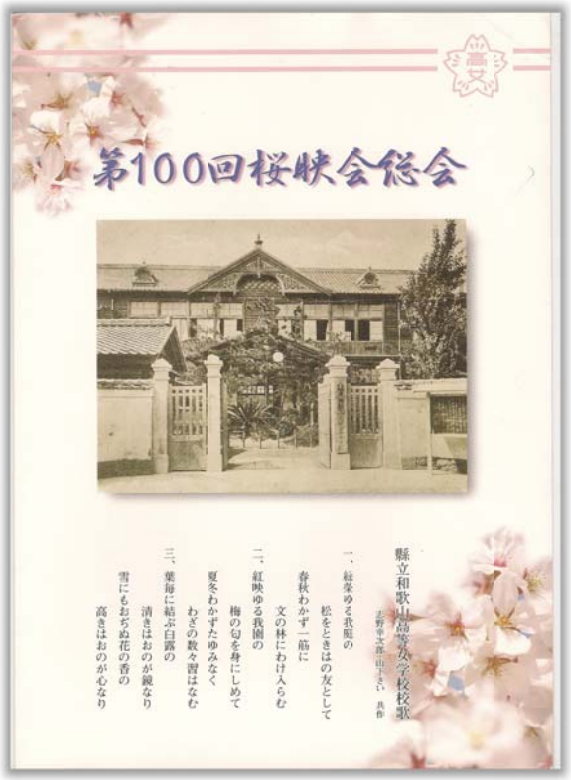
【成果の概要】

近代における旧和歌山市は、藩政時代の町の構造を引き継ぐように、和歌山城を中心として北側と東側の旧町人町に商工業地、南側と西側の旧武家地跡に住宅地が多く存在していた。そのため、それぞれ小学校区によって保護者の職業構成やそれに伴う家庭教育のあり方も異なる特徴をみせていた。本研究では、1920 年代末～1930 年代を分析対象時期として、卒業生たちの出身小学校を「和歌山師範学校附属小学校」「住宅地域小学校」「商工業地域小学校」「郡部の小学校」「県外の小学校」の 5 つのグループに分類し、学校文化と生徒文化の関係性について検討した。

和高女生徒の 7 割以上は旧和歌山市内の小学校出身者から構成されていた。そのなかでも、公務・自由業と富裕層の多い「附属小学校」や「住宅地域小学校」出身者は、家庭環境的な要因、すなわち豊富な文化資本を背景として、和高女への進学を「当たり前」ととらえていた層であった。彼女たちは和高女のなかで主流派ともいえるグループを形成していた。旧市内のなかで「附属小学校」「住宅地域小学校」と対照的なのは、厳しい受験勉強の末に和高女への合格を果たした「商工業地域小学校」出身者であった。

和高女の学校文化の特徴として、学業に熱心であること、質実剛健であること、品行正しくすることがあげられる。そのため、厳しい学力競争や細かな校則で生徒たちは管理されていた。このような学校文化に対し「附属小学校」出身者のなかには、自分が経験してきた自由主義的な家庭の教育方針や、新教育運動の影響を受けていた附属小学校の伸びやかな文化との差異にとまどいや疑問を感じる者が含まれていた。一方、「商工業地域小学校」出身者は、学校内で経験する学力競争やモダンな西洋文化と、家庭生活のなかで期待される前近代的な町人文化の両方の世界で生活を送っていた。

生徒たちは学校が押しつける文化に対し、「和高女生の本分」という解釈を行うことによって適応していたのである。



和高女同窓会　総会　　パンフレット